

ふるさと、風

第71号 (2012年4月)

風に吹かれて (50)

白井啓治

『昨日には明日の夢はないと春のいう』

風に吹かれてと題しての呟きも今回で50回となった。ちよつとお洒落なコラムのような文を書いてみたいと始めてみたのであったが、お洒落とは程遠いものになってしまった。それでも50回も続いたのかとちよつと驚いている。

コラムと言うとどうしても荒垣秀雄氏の天声人語を思ってしまう。天声人語は今でもまだ続いているのであるが、小生などは天声人語と言うとどうしても荒垣秀雄氏のコラムと想ってしまうが、矢張りそれは年代の所為であろう。荒垣氏の天声人語と今の天声人語を比較してどうこう言う気はさらさらない。ただ「天声人語」という題名に懐かしさを感じながら毎日読んでいた感覚は否めない。それ程小生の青春時代の思い出の中に格調高さを帯びて印象付けられているのだろう。

前にも何度か書いたと思うが、小生は「昔は良かった」という言葉が大嫌いである。昔よりも今の方が遥かに良い筈であるし、そうでなければ人間この世に生きている甲斐もなければ生き延びている意義もない。本当に昔の方が良いと思えたら

今すぐにも首を括つてこの世とはおさらばするだろう。人間として夢の持てない世に生きる気持ちにはさらさらない。

昨日の事ばかりを懐かしんでいても所詮は昨日のことで、そこに明日の夢がある訳ではない。明日の夢を創造できない者が、負け犬になって昔は良かったと言うに過ぎないのだと断言してもいいだろう。

原因と結果の関係を何もかにも当てはめて話をするつもりはないが、今日という日の在り様というものは、昨日を原因とした結果であると言うことができる。この考え方からすると昔の方が良かったというのは、原因となる昔に何もしてこなかった、という事になる。

今日の暮らしに不満があるというのは、昨日の暮らしのあり方の拙さが原因となつて起こしているのである。だから今日は、昨日のような明日に不満を引き起こしてしまう要因をつくり、残さないうことが重要である。今日とは明日の夢を紡ぐ日ではないから限らず明日に夢を実現した現実が造りだされるという事はない。

この数年間と言うものの歴史がブームのように取り上げられ、色々な本が出版されている。特に女

性の歴史に興味を持つ人が増えてきているのだという。自分の国や地域の歴史に興味を持っていたくのは大変結構なことだと思う。しかし、反面歴史を大切に考えることの意味について、果たしてどのくらいの人々が理解できているのかと心配にもなる。

ふるさと風の文庫新刊案内

◎ふるさと歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の作品が全集となりました。今回は第1～6巻が発売されました。(各巻1200円)

(歴史の里石岡とは言われながら、多くの歴史・文化が忘れられていく中で、伝え残していかなければならない歴史・文化を、独自の打田史学の目をもって改めて見つめなおした作品集です)

◎兼平ちえこのふるさと散歩「歴史の里いしおかめぐり」(1200円)

(ふるさと石岡の絵散歩文庫。東日本大震災の被害に合う前の、貴重な石岡の史跡の絵が満載です)

※ギター文化館および街角情報センターにて発売しております。

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

この石岡のことを考えると、多くの市民の抱いている歴史認識というのは残念なことに、歴史を他との優位性を比較自慢するためのものとしか見ていないことである。そのために、自分たちに都合の良いように作り変えをしてしまい、いつしかそれが真実だと思い込み、優位性の自慢話にしてしまっていることである。

だがこのことは石岡だけではない。各時代の歴史書と言うのは大なり小なり、時の権力の都合で書き直されているものであり、ある人は、歴史書とは事実とは違う嘘を書いた書の事である、と言っているくらいである。

一つの事実が、時には非難の対象になったり、あるいは抹殺されたりという事は各時代に起きている。それは日本最古の歴史書である古事記以来、歴史書とは時の権力誇示の道具としての役割を与えられてきたからと言える。

しかし、それも本来の歴史、即ち「暦の記録にはじまり事実の記録」という事から離れて、一つの物語となっていたと考えれば、嘘や捏造も物語として残されてあればそれはそれで一つの事実として捉えることが出来る。そしてその事実が確りと保全されてあれば、嘘であれ捏造であれその物語としての事実からその先にある真実を見る事が出来るので、大切な歴史的資料とも言える。

歴史の面白さとは、事実が捏造かは別にしてその先に潜む真実を想像することにあるのではないだろうか。歴史に潜む真実とはその社会における人間の暮らしの心模様という事ができる。だから過去を知ることによって未来のあるべき姿を創造するヒントを見つけることが出来るのである。

ところで過去を知ることによって未来のあるべき姿を創造する、で思い出したのであるが、昨年の東日本大震災以降やたらと「絆」という言葉が使われる。小生、へそ曲がりというわけではないのであるが、何でもかんでも絆、絆、絆と連呼することを嬉しく思っていない。

昨年の漢字を「絆」と書いた坊さんがいたが、一瞬これは贗坊主？ か、と思ってしまった。絆とは現代語では「人と人とのかたい結びつき」と解釈されているが、過去を振り返つての意味は「牛や馬を逃げ出さないように繋ぎ止めておく」ことを意味する言葉である。

言葉の意味するものは時代とともに変化していくものであり、その事に関しては、何ら異を唱えるつもりはないのであるが、昨年の大震災被害などを振り返り、人と人とのつながりを大切にしたいという意味で、その年の漢字を選択するのであれば、「絆」という漢字で良かったのだろうかと思ってしまう。それにお洒落でも美しくもない。

自分たちの国や住む地域の歴史に興味を持つことはとても大事な事であり、未来を創造していく上では不可欠の要件と言える。歴史を知ることの意味とは、事実の先の真実を思い追及することである。歴史は未来の創造のために重要なものである。優位性を自慢をする道具ではないことを良く考えることが大切である。歴史を優位性の比較自慢の道具にしてしまうと、もう役に立たない Tomorrow の事を考えないで平気で捨ててしまうようになる。寂れゆく町を見ると、その地の将来を創造していくために必要な歴史を文化として保全していく事を忘れて、新しい流行ものの尻ばかりを追いかけている愚かな姿が見えてくる。

疎ましき事のみ多かりき

菅原茂美

この世は、あまりにも疎(うと)ましきことが多すぎる。人間は自然の一部なのだから、天が下した試験には耐えねばならない。智慧を絞って、被害を最小限にする努力が必要だ。しかし、人間の浅智慧から起こる禍は、何としても、その規模を小さくしていかなければならない。例えばCO2増加など、小さなことでも、それが元で、人類滅亡につながる事も有りうる。

私はかなりの楽道家。『世の中、何とかなるさ!』で通してきた。浮世の不条理に、一々腹立てても仕様がな。また緻密な計画をたてても、想定外の要因が絡み、中々思うようにいかない。それに私は、東北人特有の辛抱強さは、多少持っているつもりだが、「おしん」ほどでもない。それが本物なら、私はとくにプロの棋士になっていたはず。

しかし、何事もすぐ投げ出すわけではない。皐月ブーム時代に虜になり、今年で丸40年。今でも、私の心の中で、ドツカリと居座っている。コツコツ育てた若木も、太いものは根本が、ビール瓶ぐらいに成長した。「大盆」の鉢が宝物。花咲か爺さんが生きがい。しかし、展示会などには、おこがましくて、出品する気にはなれない。人は、なんと言おうが、私が気に入れば、それが「絶世の美人」。更に最近、ほとんど化石燃料を燃やさずに、カトレア・胡蝶蘭を咲かせている。

また仕事の面では、自慢話みたいで恐縮だが、家畜防疫の研究発表会で、全国最優秀賞を得た事もある。それが元で、専門誌に多くの論文掲載もし、全国22の都道府県で47回も講演依頼があり、9つの県からは3回以上も呼ばれた。また農水省

の推薦で、外務省から囑託として要請を受け、発展途上国への国際協力として、現地の風土病と闘いながら全力を尽くした。

* * * * *

さてその楽道家だが、最近、国の内外に、許し難い出来事が次から次と連発するので、どうにも我慢ならない。いくらのおんぶり屋でも、世間の度を越した、理不尽には黙っていられなくなる。なにゆえ、こうも世の中が不条理で満ちているのか？ 動物としての人間の進化の果てとは云え、弱肉強食で、自分さえ腹を満たせばそれでよいのか。人間は崇高で神に近い特別の存在などというのは、妄想にすぎない。その証拠にこれまで、人類は、戦争など残虐な行為を幾度繰り返してきたことか。歴史がはつきりそれを証明している。

【知能の進んだエイリアンが、天空からこの地球人を見たら、呆れ果てよう。アリンコがケンカしてるのと何一つ違わない。せいぜい、うぬぼれドブネズミぐらいにしか、見てくれないだろう。】特に先進国では、一部の者が国の富の大半を占める。人を陥れても己の利のみ追求する。なんのためか。文明の進化なのか、怒り心頭に発す。これも歳を取ったが故の小言なのか。放つときやいいのかも知れぬが、世の乱れを許せぬ老犬は、吠え出したら止まらない。列挙して背理を糺す。

①被災地復興の遅れ

東日本大震災発生から一年を経て、生々しい映像など編集が進み、テレビでその実像が、放映された。マグニチュード9も、宮古市姉吉地区の最大38、9の津波の高さも、北上川を49km遡ったのも史上最高の中で、多くの人々が、命がけの

撮影を実施していた。

『〇〇ちゃん、早く駆けあがれー早く、早くッ』と撮影者が知人に呼び掛ける目の前で、人が波に飲み込まれ、そのまま姿を消していく。

津波は正に「怒涛」。何年もかけて造った堤防を荒れ狂った黒い怪物が、安々と乗り越えて来る。次から次と家を押し流し、桶の中で芋を洗うように、無数の車をゴチャゴチャにかき混ぜる。この世に、こんな事が……。正に地獄絵だ。

仮設住宅で、家を失い、家族を失い、途方に暮れる老夫婦。仏壇の前で流す涙も枯れ果てた姿。今、車で走っている道路が、突然目の前で陥没。車の半分が前のめりで、かろうじて残っている。別の場所では、撮影者の目の前で道路がビッと亀裂。路面が左右別々に動いている。

都会のビルを望遠カメラで撮影した映像では、ビルとビルとが左右に揺れ、縦線が交差している。さて、これほどまでに巨大な被害をもたらした大震災に、国は第4次補正まで対応した。復興交付金や特区の制度も整った。それはいいが、今まで私は何度も書いたが、あまりにも使い勝手が、よくない。世論調査の結果は、復興は78%の人がさっぱり進んでいないと答えている。その原因は「政府の対応」に問題があるというのだ。

政府は、東北3県を中心に、7県59市町村に、1,85兆円の交付金の配分を決めたが、その使い方について国は、ツベコベ文句を言い過ぎる。自治体ごとに状況が違うのだから、全て自治体に任せればよいのに、政府が余計な口出しをする。要するに政府は交付金に「ひも」をつけ、なにかに恩に着せる。国民の治めた税金を使うのだから、当然、「焼け太り」など、理に反したことは許

されない。しかし、一日も早い復興がなされないと、散った住民は帰ってこない。集落が永遠に消えてしまう。

②消えた年金資金

AII投資顧問会社が、中小企業などの組織する「基金」から預かった厚生年金資金2000億円を消失。無責任極まりない。以前は、基金の運用は50%を国債など堅実なもの、リスクの高い金融商品は20%以下と規制があったが、金融自由化のため、97年に廃止された。以降は、天下りの素人が巨大な資金を操ることになったという。

労働者がなけなしの掛け金を、年金資金として積み立て、会社も苦しい財政の中から継ぎ足した資金を、預かった顧問会社が、運用を誤って消失とは許せない。しかし出資者には、大変利益が増えていると虚偽の報告。こんな人を馬鹿にした話があるものか。監視する金融庁のお目付け役も全くの節穴。国家が機能していない。こんな怪しいらんことが、なぜ堂々と世の中をまかり通るのか。同じ穴のムジナ同士が運営をやったり、監視をやったり、まともなわけがない。

全国に登録された投資顧問会社は、265社。それを利用する、私的厚生年金基金は、全国で、596もあるという。基金には646名の天下りの官僚OBが勤めている。一年年収800万円とすると、労働者の掛け金が、年に52億円も吹っ飛んでしまう。年金資産が増えようが減ろうが、自分が勤めている間、多額の給料さえ貰えばそれでよい。こんな理不尽な話が、なぜまかり通る？ 各基金は、それぞれ総資産の30%ほどを顧問会社に預けているのが実態だという。世の中に悪党

は星の数。金を預ける時はくれぐれも注意が必要。老いた身には年金こそ命綱。国の監視機関は、

事件が起きてから初めて、監視強化を図るのではなく、常に起こりうる可能性を想定し、国民を守る義務がある。有名大学を出て、選り抜かれたエリート官僚なら、それぐらいの頭を働かせろ！

【官僚が全て臨機応変の対応ができないと言っているのではない。東日本大震災の時、国交省東北地方整備局長の徳山日出男氏（55）は、テレビ会議で、当時大畠国交相に東北道・4国から海岸に向かう『緊急路の開通が最重要』と申し出たら、『いいと思うことは、私や次官に相談しなくとも全部やれ』との返事。すると徳山氏は、まず建設会社の重機を非常招集し、一気に横線を開通。更に津波で役場が流された大槌町などもあるので、全国からまずプレハブを買いあさり、簡易トイレを400も揃え、洗濯機・ふとん・おむつ・バナナ・ガソリン、更には棺まで大量に用意し、この1年間で、自治体のSOS²¹⁸回に対し、支援物資を198回にわたり送り届けた。現政府の官僚排除は、使いうで任されれば、こんなに機転の利く官僚もいるのだから、大畠さんを見習えと言いたい。人は信頼され、任されれば、大きな働きをする】

③過労死

過労死は、日本以外の先進国では殆ど見られず、相当する単語もなく、英語ではKAROUSHIと言われ、国際共通語になっている。

日本人は働き者などと言われるが、裏を返せば、こんな人権を無視した後進性が存在する。過労死は、周囲から暗黙の強勢を受け、長時間残業を強いられ、働き盛りの、主に40〜50代のビジネス

マンが尊い命を失っていく。正に封建的な奴隷制度とあまり変わらない後進性が、厳然として日本の現代社会にのさばっている。病死としての過労死は、心筋梗塞・クモ膜下出血・急性心不全などであり、最も悲しい事態は過労自殺（2009年国内で63名）や孤独死・孤立死などである。

現在の労働基準法では、労働時間は1日8時間で、週40時間と定められ、これを超える場合は、労使協定の締結が義務付けられている。但し、超過勤務は年間360時間を超えてはならない。当然超過勤務は、25%以上の割増金を払わなければならない。しかし、現実にはこれをはるかに超える「奉仕」を強いられ、訴えがなければ、黙視された状態が巷に多数みられる。それなのに、これを犯した経営者は、わずか30万円以下の罰金か、6か月以下の懲役しかなく、あまりにも、人権を軽視した罰則だ。日本の繁栄がこんな不合理な労働条件のもとに築かれたかと思うと、残念至極。

私自身、県庁時代、財政課から『今日のヒアリングは2時から』などと電話を受け、よかった！今日はまともな時間に家へ帰れる…と喜んでいたら、実は午前2時から…ということで、ガツカリしたことは何度もあった。車で2〜3時間の仮眠でまた勤務。勿論、超過勤務手当など、予算の範囲内で、それを超えた分は知らんぷり。県庁でさえこうなのだから、中小企業などでは、さぞや、きつい現実が…と窺われる。

勿論、非常に良心的な経営者もおられることだろうが、労働者が失職を案じる心理を逆手にとり、乱暴極まりない経営者は多数いる。そんな事例は敢然と労働基準監督署に訴えていくべきである。そうしないと、日本の企業はいつまでも大人にな

りきれない。大事な従業員の犠牲の元に繁栄するくらいなら、規模を縮小しても、人間らしい、生活が保障される会社経営をやってほしい。

④自殺

毎年日本で3万人以上が自殺。こんな理不尽がまかり通ってなにが先進国か？

日本では1998年、山一證券や北海道拓殖銀行が破綻し、未曾有の金融危機に襲われた。企業の倒産が増え、前年より8000人も自殺者数が増し、以来14年間も3万人以上が続いている。

2006年政府は、超党派の議員立法で「自殺対策基本法」を成立させ、国や自治体にその対応を義務付けた。そのせいか、ここ数年、自殺者数はわずかに減少傾向にあり、一時4万人近かった自殺者数は、2011年は、30、651人であった。男女の比は、男性3対女性1の割合である。

自殺の主たる原因は、健康問題が65%、次いで経済21%・家庭15%・学校問題と続く。更に就活失敗や、学業不振からの若者の自殺には、本当に心が痛む。

人口10万人当たり自殺者数は、日本は、ロシア（30名）に次いで高く、24名である。主要国ではフランス17名、ドイツ12名、カナダ・アメリカ各11名、イギリス・イタリアが各7名である。

震災後はPTSD（心的外傷後ストレス障害）により、不眠や今後に対する不安から、また自殺者が増える傾向が見られるので国民あげて、適切なその対応が迫られている。自殺は心の病なので、他人は関与できないとしてしまえば、思考の停止だ。周りの人は苦しんでいる人に、しっかり耳を傾け、話を聞いてやる。そして、心の支えとなるよう心

がければ、もつともつと悲劇は減っていくだろう。あまりにも近隣との連携が希薄になった今日、もつと声かけ合って、絆を深く結ぶ習慣が、今、最も必要とされている。

人は他人のために役立つことをし、自分が嬉しくなると、中脳からドーパミンの分泌が多くなる。すると自らも健康状態が好転し、周囲との人間関係が改善される。それが自殺予防につながり、ささやかでもよいから、身近に心の支えとなるよう、皆で心がけたいものである。

⑤大学生の学力低下

いくらゆとり教育の弊害とはいえ、現役の大学生で、小学6年生の算数の問題が解けない者が多数いるという。「平均」という意味が分からず、簡単な「分数計算」ができない。

大学経営者も、少子化時代で学生が集まらないかもしれないが、こんな者を入学させる根性が、よろしくない。要するに金もうけ主義と言われても仕方あるまい。一步譲って、入学は許可したとしても、絶対に低学力・無気力の者に、卒業証書を手渡してはいけない。勿論、中学や高校側も、最低でも、小学生並の学力を身につけなかった学生を、素通りさせた責任は重大である。

大阪市の橋下知事は、14年度から、市立小中学校の全国学力テスト結果を公表すると発表した。全国でも鳥取県と横浜市が情報公開請求により、結果を公表した以外、公表の例はないという。「学校がランク付けされる…」というのが非公開の理由だが、その陰に隠れて、学校側の学力向上努力が薄れがち…というのが実情らしい。日本がこの厳しい時代にしつかり生き残るためには、国民

の「知的向上」が必須である。

国は私学振興費など、それなりの補助金をかなり私学に交付しているはず。それが、勉強意欲のない学生に費やされるのなら、国費の無駄遣い。そのような者は、毅然として退学させるべきである。学業そつちのけで、遊び惚けているヤカラに、国費投入など、もつてのほか。

そして、小学生の分数計算が解けないような者に、大学卒業資格を与えることは、世界に対し「恥」である。教育の機会均等か、平等主義の徹底か知らないが、貧しさのため、大学進学ができなかった優秀な人材は、いくらでもいるわけで、そういう人達に対しても、失礼であろう。本人や親の見栄で、大学など、行くものではない。

⑥瓦礫処理の協力拒否

放射能に汚染した瓦礫の処理協力については、後で述べるとして、地震や津波により生じた瓦礫の処理については、全国自治体は、もう少し協力体制をとつても良いのではないか。明日は我が身かも知れないではないか。とにかく被災地は、山積みした瓦礫を片付けないことには、復旧復興の足がかりがつかめない。山積みした瓦礫は、内部で醗酵し、湯気が立ち、発火の恐れも高いという。これを早期撤去しないことには、復興のスタートラインに立てないのだという。

新聞報道によれば岩手・宮城・福島³の3県で直ちに処理しなければならぬ瓦礫は、計2253万トもある。このうち最終処分が完了したのは、5,6%のみ。通常の処理方法では石巻市の場合、106年分に相当するという。更に全半壊で撤去しなければならぬ住居などを加えると、膨大な

数に…。そこで国も乗り出し、各自自治体に処理の協力を要請したところ、受けてくれたのは、東京都・青森県・山形県のみ。秋田・神奈川・静岡県が現在（3月中旬）検討中とのこと。

浮世の風は冷たいものだ。日本列島は地震列島。「明日は我が身」いずこも同じ。極限の状態の時にこそ、互いに助けあうべきだ。日本人は儒学教育などで道徳心が厚く、互いに助け合う精神など昔から根強く育っているはず。先の震災の時、商店から略奪など起こらず、世界から高く評価されたばかり。それなのに、他人が溺れかかっているというのに協力拒否など、いつからこんな薄情列島に化したのか…。世も廃れたものだ。

さて、除染や、放射線に汚染した瓦礫の処理であるが、その一時貯留場所さえ決まらない。子供が安心して遊べる場所を確保するため、除染などで、放射能汚染物質を除去し、将来に禍根を残さない処置が、喫緊の課題である。にもかかわらず、危険なものは、身近に置きたくない心理は分かるけれども、所詮、清浄地に運ぶことは無理なので、地元で話し合い、人郷離れた場所にも一時保管し、それから、最終処分を講じたら良い。

住み慣れた故郷を復旧するためには、速やかに汚染物質を取り除き、避難した人々に早く帰ってもらふことこそ肝心であろう。世の中に「完璧」はあり得ないのだから、妥協すべきは妥協して、次善の策を講じてほしい。

⑦ストーカー殺人

長崎県で、若い娘（23歳）に付きまとうストーカー（27歳）に、娘の母（56歳）と祖母（77歳）が2011年12月16日殺害された。犯人はメー

ルで殺人予告をしていた。娘の父は、娘が暴行や脅迫を受けるなど、凶暴なこの男から家族を守るため、再三警察に対応を頼んだが、タライ回しで応じてくれない。ストーリーはあまりしつこくすると相手は避けるようになる。すると周りの物が、妨害していると考え、殺意を抱くのだという。娘の実家のある長崎県・娘の居住する千葉県・凶悪犯の実家のある三重県のそれぞれの警察署は、いずれも切迫感がなく、まともな対応をしてくれなかった。今忙しいから1週間後に届け出てほしいとも言われた。特に男は、自分の両親にまで暴行を働き、親が息子を逮捕してくれと頼んだが、警察は何もしてくれなかったという。更にこの男は、以前にもストーリーカー行為で、警察に逮捕された前科者であった。

警察庁は、殺人事件に至った事により、やっと腰を上げ、関係警察署とも連携を取って、再発防止に努めるよう通達を出した。危険だから助けてくれといくら頼まれても、結論として、人が死ななければ具体的行動に移らないというのは、国民の生命を守る警察として、あまりにも酷すぎる。

* * * * *

他にも疎ましき事案は無数にある。警察の悪口で恐縮だが、何としても許せないのが、「冤罪」。強制自白で何十年も牢にぶち込んでおいて、後であれは間違いでしたでは済まされまい。検事や確定判決した裁判所。寄ってたかって無垢の人を罪人に仕立てる。足利事件、布川事件などなど。

更に収得金を、返還したように虚偽の書類を作り、着服した定年間際の警察官。飲酒運転のアルコール検知値を水増しし、多数検挙し、成績優秀で表彰を受けた警察官。もうホドホドにしてく

れ！ 社会正義の番人なのに！

今回は国内編として、思いつくままに疎ましい事案を、順不同で列挙した。このような悲惨な出来事が、二度と繰り返されないことを、ただただ祈るのみ。そのためには、社会正義を貫く精神の涵養が第一で、現状を国家の危機ととらえ、国民総動員で、モラルハザードを一掃する決意が必要である。

茨城の縄文語地名4

鈴木 健

岡・手賀

ヲカ＝陸地／テガ＝海岸

語源

日本列島に渡来してきた人たちは、当初、

里、すなわち【*ga* 浜】【*ts* 岬】＝海と陸のはざ間で生活し、里山と里海での狩漁を生業としていた。当時、陸は海に対する概念であり、まず海からの視点で陸地を表現したことが考えられる。丘・岡（*oka*）は台地や小高いところではなく、旧カナが示すように、ヲカすなわち、【*wor* 水】【*ka* の上】のほとり、の岸】の開音節化 *worka* で、陸地のことであつたろう。北茨城市関南町神岡の岡はその意味で、【*ka* 岸】【*mu* 入江】の【*wor* 水】の【*ka* 上】＝入り江になっている岸の陸（ヲカ）だったか。域内を上記江戸上川や尻無川が流れている。また、

カップの岡あがりとか岡蒸気（蒸気船の岡あがり＝蒸気

機関車、陸稻（ヲカボ）のヲカも水に対する陸であり、それは、銭湯の洗い場や硯の墨をする部分を指すこともある。縄文語の語源が今も生きていたわけだ。万葉には岡や水城の枕詞として「水茎の」があつた。茎は【*ku* 飲む】【*si* する】の当て字と思われ、*wor-ka*（水・岸）で水（*wor*）をクキするゆえに、*worka* 岡の枕詞となつたのであろう。「水茎の岡の木ノ葉に」・「水茎の遠賀（ヲカの水門に）」（『万葉集』）、「水ぐきのをかのやかたに」（『古今集』）。「水茎の水城の上に」（『万葉集』）と水城（水堀）の枕詞であるのも同じ由来と思われる。平安時代に入ると、水茎は筆を指すようにもなつた。これも硯の岡とつながる。

秋田県の男鹿半島のヲガも【*worka* 水岸】であつたろう。その先端近くに戸賀がある。それは【*to* 海、湖、沼】【*ka* の上、ほとり、岸】で、海岸のことである。行方市手賀（テガ、千葉県柏市手賀も、上代東国方言に多く現れた *o-te* の転音がここにもあつたものと考えて *e* を *o* に戻してみると、トガ（海岸）。それ以外の語源はまず考えられそうもない。また、上陸後の視点での岡は、より小高いところ（いわゆる岡）を指すようになる。行方市の大字岡はその岡であらう。

転音

worka → *worka* / *toka* → *teka*

山

ヤマ＝山手

語源

アイヌ語に【*yama*（沖または里に対して）

山。日本語からの借用」とある。そうであればその日本語の山は縄文語 **【sa** (沖に対して) 陸、陸岸、陸の方 **【mak** うしろ、奥、山手 **】** が原義で、やはり海が視点となる。子音語尾消去母音化、**yama** ヤマ (山、山手。古語、竜崎墓場、九州 雑木林、沖縄 樹木の多く繁るところ、林、山林、山野)。陸の奥、即ち山の手で、薪にするような雑木(柴)の生えている、あるいは墓地になるような、裏山のことであった。生活域のうしろの、いわゆる里山 (kim) である。九州・沖縄に原義が残る。ヤマハキ (関東 落葉拾い)、ヤマイヌ (沖縄 野犬、野良犬、茨城 狼)、ヤマオケ (竜崎 棺桶)、ヤマユキ (出棺) などもある。九州甑島では、農耕をヤマ、農民をヤマトー、漁労をオキ、漁民をオキトーと言う。生活圏が広がるにつれてヤマは後退し、やがて、現在の山岳を指すようになったのであろう。

転音 yamak→yamak

田和・峠

タワ＝タウゲ

所在語源・転音

太子町と黒羽 (栃木県大田原市) は山稜のたわんだところを通る国道によって結ばれている。そこは関の田和と言われ、同町佐貫の小字名にもなっている。また、同町から馬頭 (栃木県那珂川町) へは境の明神峠を越えて行く。タワは低くタワんだところには違いなさそうであるが、語源はなにか。アイヌ語 (縄文語) に、**【taor** 低いところ **↑tra** 低 **／or** 所 **】**、**【taorke** = **taor** **】**。語尾 (意節末) 子音消去母音化 **taor**→**taorke**。たうたオ (中国・四国・九州 峠)、**o→a**、**taa** ター (愛知 峠の低い所)、分割単母音化、**tawo/a** タワ (群馬赤城山 才オダワ (天鞍部)・タワ (出雲 「峠を凡て多和と云ふ。」『古事

記伝』・茨城 関の田和)。taorke の **o→u**、**tauge** タウゲ (境の明神峠 トウゲの旧かながタウゲ)。タワム・タワヤカなどはそれからの派生であろう。手向ヶが峠になったと言われるが、「道神 太無介乃加美 (タムケノカミ)『和名抄』とあるように、手向けは、道のあるところどこでも行われた。鶴岡市羽黒町手向 (トウゲ) は麓にある。茨城に峠は一〇カ所前後あるが、田和は関の田和だけ。

君田

キミタ＝山中

語源

アイヌ語 (縄文語) には二種類のヤマがあった。**【kim** 里または沖合に対して云う山。生活圏の一部としてのヤマ。村の背後の生活資料獲得の場としての山。『爺さんがヤマへ柴刈りに行った』などという時のヤマの観念に当る。したがってこの kim は聳えることができない。それが **nupuri** 「山」との差である。』その kim が茨城の地名にも入っている。**【kim** 山 **】** **【un** そこにある **】** **【ta** ところ **】** **↑**、消去開音節化、**kimimata** キミタ、高萩市の山間集落名の君田である。上君田に入ると、800 メートルクラスの山は岡に見える。松浦武四郎『手塩日誌』にある北海道の「深山 (キミタ) の村 (ユタン)」そのものだ。**【kim** 山 **】** **【pa** ぶち **】** **【ta** のところ **】**＝山辺、消去開音節化、**a→e**、**kimibeta** キベタ (茨城北相馬・千葉東葛 山辺、山村) もある。滋賀県の山懐にある集落名にも君ヶ畑。この君もいわゆる君ではない。『常陸国風土記筑波郡』に、古老の言葉として、筑波郡は、古くは、「紀(キ)の国」と言った。という記事がある。紀は木であるということ、落着いているようであるが、古代に林や森はいたるところにあったので、紀は **kim** (山) の方がよ

りふさわしいのではなからうか。それは、和歌山県の旧称、紀伊 (キイ 国のもとの名、紀の国にも当てはまる。**【kim** 山 **】** **【un** にある **】** **【tok** 突出物 **】**＝神奈川の金時山は kim にある突起である。

もう一つの山は、**【kim** は聳えることができない。それが **nupuri** 「山」との差である。」とされた **nupuri** である。それは **【nup** 野 **】** **【ri** 高くある (ナル) **【i** とところ **】** と分解でき、音節末追加母音化、**nupuri**。野がせり上がったところ＝そびえているところと納得できる。「登り」はこの **nupuri** と関係があるかもしれない。**【nup** 野 **】** は子音語尾の消去母音化で **nup-ri** (万葉集防人歌・上代東国方言 ↓ノ(野)。

余談になるが、縄文語がより強く残っているマタギ言葉にキムラがある。猿のことで、語源は **【kim** 里に対して云う山 **】** **【rap** おおぜい降りる、群れをなして降りる **】**。語尾の **p** は聞き取れないので、消去母音化 **kimrap** であろう。冬になると、食糧を求めて山から里に、群れをなして降りてくるのである。サルトリイバラを山帰来と書く。当初それは猿自体のことではなかったか。

転音

kimunta→kimimata / kimpata→kimibeta / nup→nup→no

竜子山

タツゴヤマ＝ダンゴ山＝タンコブ山

語源

集団で行動するには、まず、その場所を全員が共通に認識できる具体的な表現で特定しなければならぬ。たとえば、タンコブ山を分からせるためには、肩の上にあるグリグリという言い方をした。『アイヌ語地名小辞典』には **【tap** kop ①離れてぼつんと立っている円山＝孤山・孤

峰 ②尾根の先にタンコブのように高まっている
所↑tap肩/kop=kaの上↑oあるpもの】とある。

それは撥音化・語尾追加母音化で *tannkobu* タン
コブ山。a→e、語尾省略で *tenkop* テンコ盛り、
濁音化でダンゴ山に変わった。また、地名としては、
tapkop の促音化・語尾消去母音化で、タッコ、そ

れの整音化でタッコ、あるいは、タコとなった。

所在

岩手県に田子(タッコ)、秋田県に達子(タッコ)森、福島県に立子(タッコ)山等、いずれもダンゴ山につけられた呼称で東北各地にあるが、高萩市下手綱にある竜子(タッコ)山も同系列に入る。しかし、ここは中世におこなわれた大規模な築城のため、頂上一帯はかなり削平されている。同市秋山に団子(タゴ)峯、美浦村馬掛に多古山、鹿嶋市田野辺にダンゴ山、常陸大宮市下伊勢畑にダンゴ山・ダンゴミネ、筑西市岩瀬の田子峯。群馬県吉井町多胡(タコ)は漢字の意味から「多い外国人」ということできまりがつけられているが、『万葉集東歌』に見えるそれは、漢字導入以前の地名で、地形の特徴によってつけられたはずである。多胡地域の奥には吉井三山といわれる牛伏山、八束山(城山)、朝日岳がひかえている。牛伏山は多胡の嶺、朝日岳は多胡美人と勝手に名をつけられているものの、中央の八束(ヤツカ)山だけは多胡の名では呼ばれない。しかし、地形を見るとこの山だけが均整のとれた典型的なダンゴ山、tapkop ↓ *tapkop* タコ山であった。タコ=蛸=八本足=八足(ハチツク)→八束(ハチツク=ヤツカ)。多胡地名は八束のタコ山に由来するに違いない。静岡県富士市の田子(タゴ)浦は砂丘列のなかできわだったダンゴ(田子)砂丘からの命名か。同県西伊豆町田子は田子港の北にある金山が模範的なタンコブ山で

ある。

転音

tapkop→takkop→takkop→tako・tatugo /
tapkop→tannkobu→danngobu

太子・愛宕

太子=タコ/愛宕=ア・タゴ

語源・所在

茨城のタンコブ・ダンゴに由来する地名は、高萩市の竜子山などのほか、久慈郡太子町も見過ごせない。久慈川と押川は愛宕山を挟むように合流し、そこに出来た三角州に集落が作られた。その地名がダイゴ、のちの太子町太子である。愛宕山との結びつきが強いところであることは、愛宕下や愛宕社跡の小字名からもうかがえる。その太子の愛宕山は、前掲の *tapkop* ①離れてぼつんと立っている円山=孤山・孤峰 ②尾根の先にタンコブのように高まっている所】どおりの地形で、群馬・静岡などでそのような地形をタコなどと呼んでいたことからすれば、この山もタコとよばれた可能性は高い。するとタコ・ダイゴ・アタゴのつながりも見えてくる。つまり、ダイゴはタコの発音を太子と表記し、それを太子と誤記してダイゴが定着したかと思われる。この地を流れる押川の名も珍しい。急増水が起る川かとも思われるが、太子↓オオシ↓オシはどうか。

タンコブ山はその柔和な姿と、豊富な山菜・きのこ・木の実・薪・小型獣類等によって、麓のひとびとに【aおごの】*tapkop* タンコブ山】↓消去開音節化 *atapkop* ア・タゴ→愛宕(アタゴ)という愛称で呼ばれていたにちがいない。京都の愛宕山、東京の愛宕山、県内では笠間市岩間の愛宕山はじめ、つくばみらい市、つくば市、等県内各地の愛宕サン(山・神社)はほぼ例外なく *tapkop* ①

離れてぼつんと立っている円山=孤山・孤峰 ②尾根の先にタンコブのように高まっている所】である。ただし、そのアタゴの多くは、後世、縄文語での語源を忘れ去られたなかで、ただ、ダンゴ山をアタゴと呼ぶ慣習によって命名されたものであろう。

転音

tapkop→tapkop→deko→daigo / *atapkop* → *atapkop*

八溝山

ヤミジ=冷沢

語源・転音

太子町の最北端にある八溝山は多くの谷があるので八溝ということに納得している。しかし、地元の民俗研究者菊池国夫・盛昌父子は、その頂上近くに大字上野宮の八溝という小字名があることに注目した。八溝は山全体の名前ではなく、その一部を指していたのではない。また、谷を溝と呼ぶならば、ほかにも谷を指す溝地名があるはずなのにそれがない。とすれば、その語源は【yam 冷たい】*so* 滝】=冷たい水が滝のように溢れる、ではないか。それなら「八溝名水」とも結びつく。このように考えた彼らは、同町川山の冷たい水がコンコンと湧き出していた八溝田(ヤミジデン)を傍証にした。一言付け加えれば、ソーはアイヌ(縄文)語で *so* 水中のかくれ岩、滝、床、面、表面一帯】。水中のかくれ岩ということはその上へ水が流れている沢のことであり、傾斜が急になれば滝、水量が多くなれば表面一帯ということだと推察できる。しかも、沢(サハ)は *so→soho→saha* だったのではなからうか。であれば、*yamso* は冷たい沢ということで、納得が行きそうである。

カブレ石

カブレ＝赤皮

語源・所在

彼岸花の特徴を単純に言えば上が赤いということだ。その彼岸花を高知県幡多郡でカブレと言う。日本語で語源がわからないそれを、アイヌ語では【ka 上面・表面】【hure 赤く】と難なく解釈できる。彼岸花は南方起源の植物でアイヌ圏内には存在しない。しかも、アイヌ語によって語源が解読できるが、そこでは成語としては存在しない。それはまさに、縄文人あるいはその後裔（子孫）の命名と言うほかはない。そのカブレが太子町上野宮の小字名にカブレ石、あるいは、カブレ石沢という名前で姿を現している。カブレが石の特徴だとすれば、彼岸花の【ka 上面・表面】【hure 赤く】とは違ひ、それは【ka 上面・表面】【hure 赤く】→kabure とすることになる。沢にある赤い石にはメノウもあるが、表面ということになると鉄滓（砂鉄精錬のさいの残りがすい金葉）に生ずる赤錆が考えられる。なお、ウルシにカブレるや左翼カブレもこのカブレ、岩手県では垢（アカ）のことをカブレ。いずれも表面だけが赤くなる。垢も赤である。さらに【hure 赤く】の語源は【hu なまである】【re 使役の意を表す＝あらしめる】ではなからうか。縄文人は赤いという観念を生肉という具体で表したのである。その hure はやがて非常に多い転音 hure でクレとなった。紅一字でクレナイと読ませているが、もとは紅藍が久礼乃阿井・久礼阿為（クレノアキクレアキ）で紅だけでクレであった。山形県丹生（ニユウ）川上流に紅内（クレナ）があり、鉄分を含んだ水が流れていて川底や石が赤い。ここでも紅がクレ、内は【kay 川】で、紅内は丹生川自体の古名であったろう。丹生の丹

は赤、丹生は朱砂、丹砂、辰砂等と呼ばれる朱色の鉱物、硫化水銀を指すが、鉄の赤錆の意味にも使われた。福井県の丹生川上流は古代の水銀産地であった。常陸大宮市山方の大字に舟生（フニユウ）、小字に舟生沢・舟生山がある。この舟生（フニユウ）は文字も発音も近い丹生（ニユウ）の誤記ではなかったろうかと、勝手に想像している。

転音 kabure→kabure/hure→kure

妹と姉

伊東弓子

ここ何年か真冬の日本を脱出して、あの子達の所へ行くことが通例になっている。韓国は三月二日が入学式（三月一日は万歳の日、独立記念日で祝日）なので、二月中の冬休みに二人の娘の子達と婆さんの交流の場をつくるのを考えてのことだ。

去年帰って震災後の事から、休む間も無く一年が過ぎた。七十才の坂を越した体は疲れきっていた。土産物を押し込む様に入れ、休養を期待して出かけた。烏耳島（おいど）の冷たい風と悪天候に迎えられて、調子はよくなかったが、イケメンの町医者にみてもらったせいだろうか、温室の部屋でキムチを食べ、遊びだけの生活だったことが薬になったのかすぐによくなった。

姉娘の方へ行った時、舅の姉さん二人を買い物に連れて行く日があった。私も孫二人の付添でいくことになった。姉の東林（トシリン）は歌を歌い、赤ん坊の東要（トシヨウ）は歌を聞きながら程よい車の揺れに眠り出した。右に山を頂き、左に川の流れを目にして、進行方向には高い山々が見えて

いた。限りなく続く山々の水がこの流れをつくり、ソウルへの流れ道となっている。古く両側には水運で栄えた町や大きな寺が建って賑わい、豊かな文化を産み、歴史を育んできた娘は話してくれた。又日本が統治していた頃の鉄道を電車が走って行ったのも目にした。川の両浅瀬は凍っているし、山々から流れ出る水、瀧も岩や石にしがみつくかの様に凍っていた。寒さが続いていることを物語っている。左に曲がると山村に入った。小高い山が両側に連なり、韓国独特のお墓が見える。

2012 CONCERT SERIES

ギター文化館は今年で20周年を迎えます。魅力あふれるコンサート企画で皆様をお待ちいたしております。どうぞよろしくお願いいたします。

- 4月 22 日 吉川二郎・おがわゆみこジョイントコンサート
- 5月 6 日 北口功 ギターリサイタル
- 5月 13 日 國松竜二 ギターリサイタル
- 5月 26 日 マリオ鈴木 ギターリサイタル
- 5月 27 日 パパラサ フォルクローレコンサート
- 7月 1 日 高橋竹童【Trinity】津軽三味線コンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

その下に畑を前にした家々が点々とある。畑は大半が林檎畑だった。道の下は田、そして小さな川がある。対岸も同じ地形だった。まだ柳の芽も堅い。冬將軍の支配下だ。

四十分位乗って伯母さん達の所に着いた。妹さんの旦那は林檎組合の会議に出かけ、家九十五才を過ぎた姑さんに頼んでゆつくり出来る一日と喜んで出て来た。鶏や猫が走り回り犬が吠えて「いつてらっしゃい」という雰囲気だった。一キロ位走ると姉さんの家だ。次男夫婦が夕べから来て旦那の相手をしてくれるから今日はゆつくり出かけられる。「爺ちゃんに見つかんないように街道まで出てきたよ」と嬉しそうに飛び乗った。今日は二人の休日だと笑いながらの出発だ。二人とも私と同じ位の年恰好だった。

町まで三十分位の車中は、私を歓迎してくれた、心配してくれる話題が多かった。

「日本は危ない。早く韓国へ来い」と行き成り言う。

「爺ちゃん連れて来い。落ち着いたら息子や娘も呼び寄せな。仕事は何とでもなるよ」

戦時中の話しも出た。多くは語らなかったが、「三つか四つくらいの時、爺ちゃんや婆ちゃんと逃げ回った。山の中に隠れたり橋の下に潜ったり、何が何だか分からなかったけど日本の兵隊が来っから捕まったら大変だからと言ってたよ。父ちゃん母ちゃんは色々と駆り出されていたんだ」と私の話しはそこで終わって、後は楽しそうに二人の会話が弾んでいた。

町に着くと伯母さん二人は急ぎ足で店に入っていた。娘も東林をつれて後からついていった。私は東林を抱いて町並みを歩いた。

人通りが多い。年配者も若い人も休みの日の買い物だろうか。子どもが泣いて物を強請っている様子もあった。建物の影に、道の隅に雪が残っている為か空気が冷たい。揚げ物屋の湯気と臭いに引き寄せられて一袋買った。どの位経ったか大荷物を抱えて戻ってきた伯母さん達はとても満足そうだった。あの品、この品とひっくり返して捜していた様子が目に浮かぶ。

帰り道、東林が泣いた。止めろ止めろと言う。

止めて乳をやれと言う。乳をのむ子に、

「いい子だな。うめえか。いっぱい飲めよ」

「いいな。母ちゃんと婆ちゃんと姉ちゃんと一緒でな。今日はありがとな」

と声をかけた後語り出した。

「私たちは兄妹が多くて、父ちゃん母ちゃんは山仕事、畑仕事の間にあわず、子供どころじゃなかった。私らが弟三人の世話をしたんだよ。自分らが遊びたくて親の目を掠めては、遊びに行った。後から泣き泣きついてくる。後でこつぴどく怒られた。貧乏とこんなことの繰り返しで育った弟二人は一人前になれないちゃったよ。私ら責任感じてつけど仕様がな。今は私らの家に百姓仕事に来て貰っている。食いつ持の足し位にはなんだろうと思つてな。姉弟は助け合わなきゃな。ほーれいっぱい飲んだか。兄妹仲良くな。丈夫で早く大きくくなれ。いや急ぐな。大きくなつと苦勞も大きくなる」

私たちの父ちゃん母ちゃんも、子供を可愛がる時間なんかなかったんだよ、と呟くように言っていた。

然う期うしている中に姉さんの家に着いた。次男夫婦が父親を乗せて出る所だった。施設へ送っ

て行くのだ。見つからないようにここにいと、伯母さんは窓に顔をすりつけ大きな涙を流しながら「父ちゃんごめん」と言っていたが、車が行ってしまつと「ああ、良かった、良かった」と言うなり大声で泣き出した。妹伯母さんは背中をなでておく。早く帰っていい。弟らが来て剪定をすることになってからのことでわかれた。続いて妹伯母さんの家に送った。留守をしていた大婆さんが林檎をむいて食べるように進めてくれた。この土地で働いてきた汗と陽の光が顔中に染み込んでいるようだった。

這い這いしている東要を抱くと大樹の中から新芽が出てきたような風景をみた思いだった。一世紀という時間の差をもった二人の中にビビと伝わり合うものがあつたと思う。お互いにそれを受けとり合つてほしい伯母さんは食事の支度をしてくれて、食べてゆつくりしていけ、と言つて林檎を取りに行つてくれた。旦那さんも会議を終えて帰つてくると畑に出ていった。剪定作業だとか。前は忠州の林檎が人気があつたそうだが、温暖化のせい、寒さの強いこの地方の林檎が大もてなそうだった。

帰り道は私の身近な姉妹のこと考えていた。父方のお婆ちゃんは長女だった。妹が大勢いて遠くから泊まりに来た。大人になつて離れ離れになつても年老いて合えるってどんなに楽しかったのだろう。小学校入学前後だった私は丸くて小さくて、顔も似かよつて見えた。母方のお婆ちゃん姉妹は飛騨高山から朝鮮に渡り、常に支え合つて来たようだった。

日本に戻つてからも二人で玉里に来てくれた。がたぴし縁側の陽だまりで縫い物をしていた。父

の姉二人の伯母さんは苦勞を超えて、家の為にと心寄せ合っていた。母は妹、弟がいたが常に離れていても手紙でのやりとりで励まし合っていた。二人の字が似ているのに驚いた事があった。引き揚げ者と呼ばれ戻らぬ故郷はないと私達と一緒にいた時間は姉弟の絆も改めて強くなった様子だった私にも妹弟がいる。近くに居るから声のかけ合いはすぐに出来る。特に私は助けて貰うことが多すぎる程である。

女姉妹はいいでしょう。年を老る程いいもんだと世間ではよく言う。本当かもしれない。反論したことはないが私の願いは「兄弟、連れ合い同志の繋がりはいいもんだ」であって欲しいと思う。

子供達も近くにいる者への思い忘れずに支え合ってほしいと願う。私が今日抱いていた子も、傍にくっついていた子も兄と姉がいる。これからも喧嘩をしたり仲良くしたり、後を追ったり追われたり、怒られたり、壊されたり真似したりとつきないことだろう。やめろといっても続くだろう。そんな中から支え合える力を貯えて欲しい。きつとそうなるだろう。あの伯母さん姉弟さんのように。

忠州のアパートの後ろにそびえる月居山の後ろ姿が見えると思ったらもう横の姿に変わった。遊ぶだけでなくこの国で学ぶことも多かった。

お陰さまで

兼平ちえこ

当会報六十八号にて、わたくし流の旧石岡市内の歴史ガイドブック、ふるさと風の会発行（平成二

十三年十一月「歴史の里いしおかめぐり」を紹介しました。現在、お陰さまで約百人の皆さんにお求め頂いております。果たしてお役に立っているかどうか：巣立つ子を送り出した時のように心配や不安に駆られています。そんな心配や不安の中で、幾つかのご高評を頂きました。

○目次がついていればよかった

○旧石岡市内と入れたほうがよい

○絵が大きく文字が読み易い、短文なのがよい

○行きつけの美容院に置いてあった、こうゆうガイドブックが欲しかった

○早速に主人と柏原池、染谷、村上地区方面コー

スを尋ねましたよ

○印刷、製本が手作りとは驚きだ

○石岡市議会議員に読んでもらったら如何ですか：等貴重なご意見を誠に有難うございました。

平成二年に石岡の住民になりましたが、石岡には古代からの深い歴史がある事に驚き、そしてその歴史を市民の皆さんに余り知られてない事にも驚きました。絵と文を添えての絵手紙で皆さんにお伝えしたいと思いついていましたところ、「霞ヶ浦・常陸国風土記を歩く会」の皆さんに石岡市歴史ボランティアの会のガイドとして同行させて頂いた時の同行紀を当会報、ふるさと風第二十四号から四十二号に紹介しました。この同行紀も、「霞ヶ浦・常陸国風土記を歩く会」のリーダーの方から「歴史のある街なのに、お住まいになつて土地の歴史を皆さんに尋ねても、解らないとの答えが多かった事に驚きました」と云うお話しでしたので、更に皆さんにお伝えしたいという思いがつのり会報に紹介したのでした。こんな私の思いに、当風の会の白井啓治代表がこの同行紀を絵入

りの小冊子にしてみても、との助言で発行の運びとなりました。

現在、この小冊子の印刷、製本は白井代表による手作りのもので旧八郷町のギター文化館、旧石岡市内まちかど情報センターにて販売しています。石岡市民の皆さんをはじめ多くの皆さんにご愛読頂いて、特に石岡市民の皆さんには歴史ある街に誇りを持ち、次代の子供達に郷土への誇りと郷土愛を育む為にも語り伝えていく役目があると思います。どうぞ石岡の歴史をご存知の方、そして関心ない方も、石岡の歴史を知るきっかけとしてご利用頂ければ幸甚に存じます。

そして更に歴史を深めたい方はふるさと風の会で歴史の生き字引として頼りにされている打田昇三さんのふるさと歴史物語全集（第一〜六巻）のご講読をお薦めします。ギター文化館とまちかど情報センターにて販売しています。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、
また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。
オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

そしてもうひとつ、石岡の歴史に関心をよせた方に…。

『石岡の歴史を伝えるガイドとしてご活躍してみませんか』

最近各地で郷土の歴史をもとに街おこしが盛んに行われています。石岡にも常陸国の繁栄を伺いに訪れる方々が年々多くなっています。勿論、常陸風土記の丘には県内の小学六年生や小学三年生の学習見学も多くなりました。

尋ねて来られる皆さんとの出会いを楽しみながらご自分の大切な時間を是非石岡市歴史ボランティアの会でご活躍下さればと思います。

お問い合わせは毎週金、土、日、祭日、石岡市民俗資料館内（〇二九九―二三―二三九八）で受け付けております。

・梅一輪覗く 彼岸の入りに
・歳忘れ踏むペタル 椿大笑い

ちえこ

水戸の黄門様は…？

小林幸枝

江戸残酷物語というテレビを見た。ビックリ仰天だ。水戸の黄門様は、庶民の味方などんでもない、実像は血も涙もない冷血漢だったのだという。

私はテレビドラマの水戸黄門の大ファンだったので、それを見て大ショックでした。テレビドラマでは慈悲深い正義の味方、庶民の味方になっており、実際の黄門様もそうなのだろうと思っていましたら、ドラマとは正反対の残酷で無慈悲な人

だったというのが、その番組でした。犬を大量虐殺し皮を剥いたり、命乞いする罪なき者を斬殺したりしたと番組では報じられていました。

打田さんが歴史のウソというテーマで連載されていますが、遠い歴史の中では何が本当で何が嘘かという事は、現代のようにしつかりした証拠が残されていないのでわかりません。でも物語として美化されて残されているのだから、全くの逆ではないだろうと思いますが、テレビ番組を見てみると、自分の思いがぐらついてしまいます。

神話の世界のような時代の話だったら、記録も残されているわけではないの、そういうこともあったかもしれませんが、江戸時代の事ならもう少しはつきりとした資料文献があると思うのですが、水戸の黄門様は正義の味方、庶民の味方ではなく、残酷非道な人だったのだろうか。

冷静になって考えると、ドラマの中で皆が恐れ入る印籠を出すのは一番最後で、もっと前に印籠を出せば人が死ななくても済むのにと思う話が沢山あります。

やっぱり残酷非道の殿様、いや御老公だったのだろうか。

そういえば、6月の公演の台本は、石岡では町を焼き払い財産を強奪した極悪人と嫌われている平将門の伝説を基にした本になるそうです。

常世の国の恋物語るに仕立てられるのだから、残酷非道の物語ではないと思うのですが、水戸黄門様よりもっと昔の話ですから、真実はもっとわからないと思います。どんな話が出来上がってくるのか今、楽しみに待っています。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063
兼平ちえこ 0299-26-7178

打田 昇三 0299-22-4400
伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館発：常世の国の恋物語百

2012 年「ことば座」のご案内

ことば座も本年で6年目を迎えることとなり、ステージも第三段階に入ります。
5年間の中で大切な仲間の輪が出来上がってきました。
この大切な仲間たちと、大声で愉快の夢を紡いでいきたいと考えております。
どうぞ変わらぬ応援をよろしくお願いいたします。

2012 年ことば座公演予定

4月8日:「美浦バレエ同好会発表会」への友情出演 美浦村中央公民館
6月15～17日:第23回定期公演 ギター文化館
8月21日:「2012 年日本芸術文化の祭典 in マカオ」への出演
9月9日:第3回野口喜広と白井啓治の「里山と風の声コンサート」ギター文化館
12月1～2日:第34回定期公演 ギター文化館

朗読舞劇団ことば座

〒315 - 0013 茨城県石岡市府中5 - 1 - 3 5

Tel 0299-24-2063 fax 0299-23-0150

朗読教室受講生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか。

ことば座では、4月より「ふる里の物語や詩の朗読を楽しむ教室」を開講することとなりました。
朗読とは、演劇の一つのスタイルです。朗読台本となる物語や詩文をかりて自分の思いや考えを表現することです。ニュースアナウンサーのように聞きやすい標準の発音で読むことが朗読ではありません。
自分が表現したいという思いを、書かれた文章(物語や詩)に確りとかりることが出来れば、茨城の人は茨城弁(訛り)でかまわないのです。標準語=正しい日本語ではありません。
当教室では、手話を基軸とした朗読舞劇団の特徴を生かし、詩の朗読では感情表現として手話演技を取り入れた表現指導も希望される方には行います。

募集人員 10 名程度。教室は毎月第二、第四土曜日午後 1 時から 3 時。

受講料月額 3,000 円。(稽古場：石岡市国府 4-3-3)

講師は、脚本・演出家の白井啓治、朗読舞女優・小林幸枝(手話演技指導)が当たります。

※詳しくは、ことば座事務局 0299-24-2063 (担当:白井)までお問い合わせください。

《特別企画》

虚構と真実の谷間

打田昇三

第四章 霧の中の栄光（2・1）

春暖を告げる奈良の伝統行事「東大寺のお水取り」はゾロアスター教の名残だと聞いたことがある。正倉院には、貰ったものか買ったのか、まさか密輸したのでは無いと思うが、シルクロード経由で渡来したペルシア（イラン）の品物が有る。それからも分かるように日本にはイラン系の人々が早くから来ていた。「盃蘭盆（うらぼん）」やら「彼岸」やら「布施」本来はお斎（おとき）と言って寺が民衆に施しをした」などは、ペルシア人が昔から守っていた宗教行事が伝えられたものと言われる。専門の先生のお説では「盃蘭盆」の語源は東イラン語の「ウラワン＝義」とされた死者たちの祭り」だそうである。生きていた者がバカンスを楽しみにする行事ではない。

この章のその一に「しつこく登場をして貰った坂上田村麻呂には、ゾロアスター教を国教とした「ササン朝ペルシア」の血が入っているのでは？」と推定された作家の方が居られる。坂上君・本人の申告とは合わないが、ササン王朝の最後の王ヤズデギルド三世が親交のあった唐（中国）に救援を求め王子のペルースが多くの民を連れて唐に來た。その連中が現地化することは有り得る。既に述べたが、田村麻呂は「金髪、赤ら顔、目は鷹のような大男」と伝えられている。イラン人もアーリヤ系であるから背は高い。田村麻呂は帰化した漢民族とされており、そこにイランが入ると全くの異人さんになる。なお、余計なことだが西暦六五一年にササン朝を滅ぼしたのはマホメッドが興したイスラム勢力サラセン帝国である。

異邦人も仏教行事を伝えるぐらいなら良いが、本来の日本人とは質が違うから、この国で生きていこうとすると、どうしても余計なことをする。日本に元から住んでいたのに、その異人どもに「蝦夷（えぞ、えみし）異人」として追討された東北の人々はさぞや悔しかったろうと思っただが、その心の痛みがやっとならした頃に、今度は名門と称する国産の「荒らし屋」が支配者として東北にやって来て、無理に合戦を惹き起こす。それが「前九年の役」であり「後三年の役」である。この名前は駄洒落のように奥羽本線に「後三年の駅」が在るほど知られているが、その内容は「猿蟹合戦」のようには理解されていない。「前九年」と「後三年」とは何を意味する数字なのか。合戦の期間を表わすらしいが前九年の役は永承六年（一〇五二）に始まり康平五年（一〇六二）に終わっている。単純な計算では十二年間になる。

芝居見物のように途中に幕間（休憩）があつたらしいのだが戦争であるから物事を正しく判断できる人は「十二年合戦」と呼ぶらしい。また前九年の役が終わってから約二十年後に起きた後三年の役も、永保三年（一〇八三）の秋に始まり寛治元年（一〇八七）の暮に終息したので合戦の期間は何度計算してみても三年間では無い。なぜ期間がはつきりしないのか。過ぎたことであるからどうでも良いように思うが、この不可解なこと、つまり「逆サバ読み」をしなくてはならない年代計算の裏に、実は二つの合戦について伝えられることの「嘘」と言うか、秘密のような事件の本質が隠されているのではないか。数字に弱い私はそう感じてならないのである。

かつて坂上田村麻呂は、蝦夷のボス・大墓公阿豆流為と盤具公母礼の二人を服従させ自治体のように東北地方を治めようとした。この案は無責任な公家

の反対で、都まで来た二人の酋長が殺され実現しなかった（その一）が、それから一五〇年ほど経って、公家の阿呆頭も少しは進歩したらしく、浮囚（服従した蝦夷）の長である阿倍氏を岩手奥六郡（胆沢、我賀、江刺、稗貫、紫波、岩手）の郡司に任命し、諸国並みに間接支配をしていた。それにより、東北地方でも太平洋側の陸奥国では百年以上に亘って平穏が保たれた。それは良いのだが猫でも髭が生えているから十年以上も飼っていると家の中で自分の地位を高めようとして、主人以外の言うことは余り聞かなくなる。髭があつたかどうか、浮囚の長に任命された安倍氏も長い間には、その支配地域内で国司並みの権威を持つようになったのであろう。何しろ安倍氏が管轄した岩手奥六郡というのは東北新幹線沿線を中心にして、現在の岩手県の半分近くを占める広大な地域であるから、安倍氏の統治が上手くいっていればいるほど、大和朝廷に任命されて赴任してくる中級官僚には羨ましく見える。

国司の任期は四年が通常らしかったが陸奥国は五年だったと思われる。なお出羽国は国司が廃されて秋田城介が陸奥守の下で統治した。陸奥国は常陸、武蔵などと同じ「大国」であるから国司の懷も暖かくはなるが都からは遠いし氣候が寒い。陸奥守や秋田城介は、何か手柄を立てて同じ大国でも都寄りの大和、河内、伊勢、近江か、遠くても越前、播磨辺りの国守に替わりたい。東国でも常陸、上総、上野のように親王の任国ならば地位は介（次官）でも国守並みの待遇を受けるから治外法権のようなおいしさを期待できるのだが。...

紫式部や清少納言が華々しく文壇に登場する一方では、その一で述べたように大江山の酒吞童子とか袴垂保輔（はかまだれやすすけ）など有名な盗賊が大威

張りで営業を開始し、御所が度々火災に遭うという何ともユニークな時代に六歳から二十五年ほど在位したのが、円融天皇を父とし、藤原道長の姉を母として生まれた一条天皇である。

藤原道長は何を血迷ったか世の中を自分一人のものと勘違いして娘の彰子、妍子、嬉子を天皇の後宮に送り込み権力を握ったのであるが、一条天皇を父とし、藤原彰子を母として生まれた後朱雀天皇の第一皇子で、藤原嬉子が母親である第七十代の後冷泉天皇は、多分、自分の親族関係が複雑で良く理解出来なかったと思う。その所為ではないが、この天皇の治世六年目に当る永承六年に起こったのが「前九年の役」である。通常は、こういう事件が何年何月何日に、どういう経緯から始まったのか記録されるのだが、不思議なことにそれが無い。殆どの史書は「郡司となった阿倍頼良の勢いが強くなった。」ことを合戦の理由に挙げているだけである。最初から怪しい。

日本外史などは、税金の納付通知書と同じで読む者の都合など考えず一方的に「是時に當りて陸奥の豪傑安倍頼時、諸部落を併せて、六郡の酋長となる。国守、秋田城介と、兵を合わせて之を伐つ」としか書いてない。この事件の典故は「陸奥話記」という当時の記録らしいのだが、其処に書かれている「開戦の理由」も「六箇郡の司に安倍頼良なる者あり。是れ同じき忠良の子なり。父祖忠頼、東夷の酋長にして、威風大いに振い、村落皆服氏し、六郡に横行す」とあるだけらしい。阿倍一族が悪事を働いた、とは書いてない。阿倍氏が討伐される理由が無いのである。

「ドングリの背競べ」のような気がしないでも無いが、政治の世界に与党と野党があるように、歴史

にも「正史」と「野史」がある。一般には歴史と言えど正史の記録を指しているが、裏の世界を知る為には野史も捨て切れない。その野史の一つである「前太平記」は、清和源氏が頭角を現す時代の話を収録した唯一の書であり、歌舞伎にも引用されているから「嘘」でも罪の無い、酒ならノンアルコールのようなものであるのか。

そういう本は真面目な政府には嫌がられ、秦の始皇帝では無いが「焚書坑儒（ふんしやうじゆ）」で燃やされてしまうのが世の習いだが、幸いなことに明治の末から大正の初期にかけて早稲田大学の出版部が残しておいてくれている。ただし、前太平記の著者は源氏から帳簿に記載出来ない資金を頂いたようで書かれた内容が御用新聞並みに一点の曇りも無い。全体が源氏一色なのである。そこで誠に失礼とは思いますが、前太平記の記事を裏から読み「前九年の役」及び「後三年の役」の真実らしきものを探ってみたと思うのである。

永承六年二月十三日に陸奥守・藤原登任（ふじわらなりとう）と秋田城介・平重成とが、それぞれの軍勢を率いて宮城県の鳴子温泉に向かった。湯治に行く訳ではなく、阿倍頼良が、郡司として管轄する岩手奥六郡から南下してくるのを阻止しようとして合計五千余の国府軍を繰り出したことになっている。此の時に、頼良軍の先手として八百余騎で国府軍に立ち向かったのは伊具十郎平永衡（いぐじゅうろう・たいらのながひら）という武士である。藤原登任の家臣であり、主君と共に陸奥へ赴任して来たと言われるが、磐城地方には土着した桓武平氏が居るので、或いはその一族かとも思われる。それ以上のことは不明である。

平永衡は阿倍頼良の娘を妻としていた。その女性

の妹が、永衡と同じく藤原登任に従う国府役人で亘理（宮城県南部沿岸部）の出張所長ぐらいになっていた藤原経清に嫁していて、後三年の役後に清原武貞に再嫁する。その際の連れ子が、平泉に中尊寺を建立した藤原清衡（奥州藤原氏の祖）となる。頼良は奥州の関門に当る衣川に館を構え、陸奥国府や秋田城などに勤務する青年たちを娘婿にした上に、大勢いた男子たちを厨川（くりやがわ）、鳥海、黒澤尻、磐井、比浦（ひら）、比與鳥（ひより）などに置き、家臣を河堰（かわせき）、姫戸（うばがと）、鶴脛（つるはぎ）、瀬原など、名前だけで一癖有りそうな要衝に配備していた。官僚の目から見れば、家臣を取り込み勢力を伸ばす浮囚の長である阿倍氏のほうが、自分たちより東北の覇者のように見えるのは許せない。

京都の政權が東北地方の支配者であるという偏見から生じる妬み僻み（ねたみひがみ）であるが、強大化した浮囚を何とかしなければと初めに思ったのが国司の藤原登任と秋田城介の平重成である。勘ぐれば、前九年の役や後三年の役は東北地方を治めるこの二人の人物が火を付けた場所に消防隊として派遣された源氏が放水ではなく油を撒いたために起こったようなもの？遠くに置かれた官僚らは、自分たちで功績をでっち上げてでも栄転がしたいのである。彼らは独善的な危機感で立ちあがった。桓武平氏に人気のある石岡市では言い難いのだが「平重成」とは、どういう人物かと言うと、これが次のような関係になる。

平将門を倒した平貞盛は、父親の国香から相続した土地と、将門討伐に依って得た広大な領地を弟の繁盛に譲って都へ戻り官僚になった。本来は平高望——平国香——平貞盛の系統で果たすべき任務は奥羽地方の争乱を抑えることであり、その為に国香らが鎮

守府將軍や陸奥守に任命されていたのである。しかし、この仕事は骨が折れる割に出世街道から外れるから、貞盛は嫌って途中から中央官庁で生きる道を選んだので、一般には広い領地を弟に譲った気前の良い兄貴のように思われているのは「嘘」である。

繁盛も土地を貰った直後は権利書を手にニコニコしていたが世の中、甘くはない。やがて奥羽地方勤務が世襲のようになるのである。そして最終的には美味しいところを清和源氏に持っていかれ、繁盛の子孫は直系が常陸国の判官職（局長級）である大掾（だいじょう＝正七位下相当の地方公務員）に留まる。彼らは大掾を姓として同族が常陸国内に広がった。

繁盛には何人かの男子が居り、次男か三男の維茂（これもち）は秋田城介として勤務したと思われる。

「今昔物語集」には藤原秀郷の孫と領地争いで死闘を繰り返した話が載っている。当時の勇猛な武士に挙げられる維茂は「余五（よこ）將軍」と呼ばれた。これは維茂が伯父・貞盛の十五番目（十に余る五番目）の養子になったからである。その維茂の三男で父親と同じ秋田城介として勤務していた平重成が、岩手奥六郡の郡司として伸びてきた浮囚長の阿倍氏を叩こうとしたのである。

一般に「喧嘩両成敗」と言われ罪は双方にあるとされるが、片方が政府とか国家とか権力者である場合には「忠臣蔵」や「平忠常の乱」に代表されるように地位が低いほうに責任が押し付けられ「反逆」という言葉を使って簡単に始末が出来るのである。相手は叩かれて消滅すれば良いのだが、これが「反逆組」のほうが強過ぎると「平将門事件」のように解決が長引き、あれこれと面倒なことが生じてくるので、その最大の問題は「権力側の嘘がバレル」とである。

さて理由はどうしても「安倍氏追討」の大義に燃えて鳴子温泉に向かった陸奥守・藤原登任の率いる三千の兵と、秋田城介・平重成の率いる二千の軍勢は、鎧兜が立派だっただけで合戦はダメであった。売られた喧嘩を忠実に受け止めた安倍軍は一族郎党しめて六千余…軍勢の差だけでも阿倍氏の威勢がわかる。僅か一日の合戦で、勇ましく攻めかけた官軍？は二千の戦死者を出した。五千引く二千は残り三千、その中には大勢の負傷者が居るから国府軍は三倍以上の敵を相手にすることになる。こういう場合には指揮官が行動の手本を示すことが大事で、陸奥守は京都へ逃げ戻り、平重成は実家のある平和な常陸国へ避難してきた。戦場に置き去りにされた兵士達の運命は…。

必然的に奥岩手六郡を預かる阿倍頼良が陸奥国を支配したようになり、旧蝦夷系の豪族たちも力を持ち始めた。国府の役人たちは、飾りに過ぎないとしても国守と秋田城介が居ないと行政が滞ると判断して朝廷に対し替わりの人物を送るように要請をした。推薦された京都近辺の自称一流武士たちは、東北の事情を知っているから「病氣だ」とか、「新幹線の乗り方が分からない」「親戚がいない」などと適当な理由で断り、誰も引き受ける者がいない。こういう場合には「嘘」が役立つ。

朝廷では、単に「陸奥国司」として募集したのだけれども「鬼退治」を「桃太郎ごっこ」と名を変えたようなものであるから結果は同じである。困った公家たちは、候補者の範囲を広げて地方に勤務中の隠れた英雄を探すことにした。選ばれたのが、その一で述べたように相模守に栄転し妻の実家がある鎌倉を基盤にして東国に勢力を定着させつつあった源頼義である。丁度、任期が切れて一旦は都へ戻った

のか、或いは常陸介を命じられて石岡に来ていたのか、ともかく東北行きを打診された頼義は、一応は困ったような顔をしてから引き受けることにした。多くの史書が、源氏勢力拡大のチャンスとばかり喜び勇んで出てきたように書いてあるが半分は「嘘」で、内心では「しめた」と思ったかも知れないが、引き受ける前に或ることを条件として申し出たのである。

それは…。

清和源氏の嫡流は貞純親王から源の姓を貰って臣籍に降った源経基である。東国に赴任し「平将門事件」の際には未だ将門が謀反を起こしていない時期に早とちりで都へ逃げ帰り「将門謀反」と報告した。

その時点では謀反が未完成なので「粗忽者」と笑われたけれども、やがて嘘が本当に変わり合戦の指揮官を命じられた。「嘘」ついでに言う、実は此の人が貞純親王の子ではなく、兄である陽成天皇の第二皇子・元平親王の子であるとする説が強い。（その一で触れたような理由）経基の子が満仲であり、摂津（大阪府）多田に住んで多田満仲と称した。此の人も親譲りのチクリが好きだったらしく、安和二年（九六九）には第六十三代・冷泉天皇の後継を巡り、村上天皇第四皇子・為平親王を推す左大臣の源高明（朱雀天皇の兄を失脚させる陰謀「安和（あんな）の変」のどつち上げに密告係として出演し藤原氏に演技を褒められた。これにより、円融天皇が即位して道長らの藤原北家が榮華に向かうのである。

満仲の嫡男が、足柄山の金太郎など四天王を擁して名を挙げた源頼光である。藤原氏に接近し武門の家として知られるようになったが、頼光の子らは摂津多田の本拠を守り「摂津源氏」として地味に広がった。この系統から第三章前編で紹介した源三位頼

政らが出る。また平家打倒の最初の陰謀である「鹿ヶ谷の変」のメンバーに加わりながら途中で平家方に寝返った多田蔵人行綱は、この直系中の直系であるから密告はお家芸である。

頼光の弟の頼親は、大和守となって現地へ赴任した際に奈良の興福寺に根を張る僧徒たちと対立

した。平安時代の奈良は仏様の威光を笠に有力寺院が威張っていたから、攻めて来たのは僧徒たちなのだが、頼親は武士であるから洒落や冗談では応戦をしない。本気で坊主を退治し過ぎた為に処罰された。それ以来、元気が無くなった。

満仲の三男で年齢差もあり長兄の頼光が親代わりのように引き立てていたのが、頼義の父・頼信である。四男は武士にならず僧になったらしい。伝説的には長兄の頼光が武士らしい人物と伝えられているが「嘘」もあるようで、頼光は政治的手腕を発揮して名を挙げた。摂政の藤原兼家（道長の父）が屋敷を新築した際には、御祝として馬を三十頭も贈った。現代ならば高級車三十輦を玄関先に並べたようなものである。その点、頼信は武士らしいと言うか、坂上田村麻呂のように合戦で少しづつ勇名を広めていったと思われる。

息子の頼義も、父親の生き方を真似ていたのであるが、平直方の婿となって思いがけず東国に勢力を張ることが出来た。武士の立場に自信が付いてきたから父親や伯父らのように藤原一族の下請けだけで満足せず、武士という商売では藤原株式会社と対等で取引することを考えたのである。その為には株を少し上げなければ：思いついた方法が源氏諸派の中でも、自分の属する流派を嫡流にすることである。安直なドラマの多くが茶道、華道、日本舞踊など芸事の家元争いを定番にしているけれども、騒いでい

る暇に「勝手に家元を名乗ってしまえば良いのに：」と思うことがある。源頼義も同じ様なことを考えて「源氏嫡流」を名乗ろうとしたのだがそこに大きな問題が生じた。多田満仲から嫡男・頼光の家系に伝えられた本流の証となる次の品々が存在したのである。

「水破、兵破（すいは、ひょうは）の鐙矢（かぶらや＝鳴る矢）」

「雷上動（らいじょうどう）の弓」

「葉早黄色（はつもみじ）の直垂（ひたれ＝武士の正装、この場合は鎧の下に着る晴れ着）」

「鬼丸、蜘蛛切（おにまる、くもきり）の二刀」

「鬼丸」の太刀は「髭丸」と呼ばれていた。罪人を斬った髭まで切れたという。頼光の家来の渡辺綱が、一条堀河戻り橋で美女に化けた鬼の腕を切り落としたと言われる名刀である。源氏の名刀を、どうして家臣が夜中に持ち歩いていたのか疑問であったが理由があった。源頼光には彼女が居た。桓武平氏高棟流の惟仲という中級公家の娘らしい。上総介として単身赴任していた頼光は任期が終わって都に戻ったので、直ぐ彼女の家に行こうとしたら、その晩に宮中の宿直を命じられて外出出来ない。そこで渡辺綱が「旦那が行けない」言い訳をしに行つて、用心の為に髭丸の太刀を借りて行ったら案の定、鬼が出てきた。この話にも大嘘がある。頼光が若い時代には宮中の警備に就いたかも知れないが、常陸国と同じく上総介は親王任国の次官（事実上の国司）であるから、帰国早々に宿直など命じられる訳が無い。

「蜘蛛切り」の太刀は「膝丸」と呼ばれ、これも単純な理由で罪人の膝まで切れたという。蜘蛛切りになった理由も単純で節足動物の蜘蛛が切れたからである。ただし、この場合の蜘蛛は大きさが二mを

超す蜘蛛の化け物で、頼光に取りついて病気にさせた。大きな塚に隠れているところを斬られたのだが、良く考えると蜘蛛のような相手は小さいほうが斬り難いし、話全体も怪しい。

いずれにしても、先祖伝来の太刀は普通過ぎるくらい普通なのだが、取って付けたような名前を持つ「鐙矢」「弓」「直垂」の三品は、伝説からして芝居がかっている。話は源頼義の父・頼信が元服をした時代にさかのぼる。永延二年（九八八）の夏に一条天皇の外祖父に当る藤原兼家が贅沢にも別殿を新築した。そこで出世の野心を持つ取り巻き連中が祝いの品物を持つて門前行列を作った。嘆かわしいことだが、それをしないと公務員は絶対に出世できないし、良い職にもつけない。

「源氏！」などと偉そうにしても条件は同じであるから、源頼光も奮発して名馬三十頭を贈ったことは既に述べた。これは、当時の頼光が馬を管理する官庁の次官級の職にいたから出来たことなのである。その時に兼家は、貰った馬のうち二十頭を主要な客のお返しにして豪華な馬具一式を付けて配ったのである。その中の一人に頼光の部下で大掾職程度の役人が居て、身分は違うが職務が兼家に親しくしている橘頼経という人物がいた。馬が専門であるから一番立派な韋毛（あしげ＝白地に黒と茶の刺し毛）の逸物をねだり、手に入れることが出来た。

橘頼経は大喜びで馬を家来に引かせ、自分は御馳走の酒でふらふらしながらも屋敷に向かう途中で伴別当廉平（はんのべつとうかどひら）という古い師に会った。顔見知り程度なので軽く会釈をして行き過ぎた。すると、一〇mばかり行つた伴廉平が大声で頼経を呼び止め「：やあ、右馬允（うまのじょう＝頼経の官職）殿、そなたに申すことがある：」と言った。頼経は

一刻も早く屋敷に帰り貰った名馬の手入れがしたいから、占い師など相手にしてられない。聞こえない振りをしたのだが、余りにもしつこく呼ぶので、仕方なく立ち止まった。廉平は駆け寄ってきて言った。

「私は他人の相を見ることが苦にならずに、多くの人々の相を見て来たけれども、一度として、それが外れたことは無い。今、貴殿の顔にははつきりと死相が現れており、それも今日、明日のことに迫っている。早く家に帰り、その災禍を免れたまえ。」頼経は、無視しようと思ったのだが死相と言われたのに動揺し「如何にすれば、その禍いが避けられるか？」を問う。廉平は言い難そうに「……されば、その方法は貴殿の親しくする者の命を断つ……これしか御座らぬ。親しき者は妻子に限らず今の貴殿に最も大切なもの、と心得られよ。必ず思い当るべし」廉平はそれだけ言って立ち去った。

頼経は、占い師ごときが……と思いつつも言われたことが気になって、あれこれと考えた。自分の延命に拘る訳ではないが、理由も分からずに命を失うのも納得がいかない。現在のところ自分が最も執着するのは家族よりも、貰ったばかりの名馬である。気持ちを切り替えれば「名馬を頂戴できなかった」と思えば良い。この馬に犠牲になって貰って、明日からまた御奉公をすれば、馬が無理でも豚ぐらいは頂けるであろう……そう思っただけで、弓矢を持つて現れた。ところが、さすが名馬で緊急事態を察し、頼経を見てしきりに嘶（いな）いた。そうなることと射ることも出来ず、後で藤原兼家に「馬は元氣か？」と聞かれて困ることも考えて諦めた。しかし替わりの犠牲者を選ばなくてはならない。馬の次に愛する者は妻である。正論とは言えないが、理屈付

けをして妻を射殺することにした。折しも、妻は母屋にいた。どういふ訳か大きい革袋に寄り掛かるようにして縫物をしていた。

頼経は思考を巡らす暇も無く母屋に向かって矢を放った。格別に弓が上手な頼経では無かったが的が近く安定していたから、矢は妻の胸を横から射通し、さらに革袋に深く刺さっていた。頼経が近寄ってみると妻は即死、怪しい革袋を見ると、中から人の呻き声が聞こえる。開いて見れば一人の僧が手に小太刀を持ち、蹲（うずくま）った姿勢のまま尻から腹部にかけて射抜かれていた。僧の懐には妻の筆跡で認め（したため）られた一通の手紙があり「夫の頼経が新築祝いに招待されているから、必ず酔って帰ってくる。隠れていてそこを待つべし」とあった。密通していた妻の暗殺計画により討たれるべき頼経が人相見のお蔭で助かったことになる。この話が広まって伴廉平の占いは一層、有名になった。

【風の談話室】

漸く庭の梅が満開になったと思つたら、それにオーバーステップして桜の花が満開になってきた。

賑やかでいいなとは思つが、季節は時に追われて順番にやってくる方が嬉しい。

疎開で北海道に暮らしていた時には、春というのは草々木々の全部の花が一斉にやってきて、冬の寒さから解放されるお祝いの式典とでも言える賑やかな季節であった。

しかし、年を取つてくると一斉の賑やかもいいが、一つ一つ楽しませてくれる方がありがたい。

《ヨイシヨ広場》（陸平をヨイシヨする会）

沖縄の風に吹かれて（3）

田島早苗

沖縄での最終日は、帰国前の一時をあこがれの首里城や公設市場を巡ることになっていて、慌ただしく宿を出発した。那覇空港で荷物を預け身軽になった一行は、開通間もない「ゆいレール」のフリー乗車券を購入して、大はしやぎで乗り込んだ。沖縄にこんな立派なモノレールが出来たのも、もしかしたら米軍基地が有るお蔭かも？等と複雑な思いを抱きながら那覇空港駅から首里駅まで、十五ヶ所もある停車場を眺め続けていた。

首里駅から徒歩十五分とパンフレットに書いてあったが、首里城までの道程は遠かった。おまけに小雨が降り出し、昨日まで万全の用意をしていたのに、空港へ雨具すべてを預けてきたうかつさを悔やみながら、傘を買う間も惜しんで、唯ひたすら歩き続けていた。

城址公園の守礼門広場で、記念撮影が行われていた。七名の仲間が琉球装束に身を包み、華やき一杯の撮影会になった。外国の観光客が大喜びで民族衣装の仲間達を撮影して思い掛けない国際交流の輪が出来た。私も老骨にむち打って着てみれば良かったかな？と心の奥底で呟いていた。約五百年に亘り琉球王朝の城だった首里城正殿の異国情緒たつぷりの美しさに見とれながら、小さな島国の宿命とその位置関係により、中国や日本に翻弄され続けた昔を思わずには居られなかった。そして今又、米軍基地という過酷な現実に立ち向かっている沖縄の現実が胸に迫るようだった。広い宮殿内の見たい所は一杯だけれど、限られ

た時間でゆっくり見ているとすぐに皆とはぐれてしまう。ここでも、途中で見つけた仲間に置き去りにされまいと必死の私だった。

再びゆいルールに乗って半分ほど戻り、牧志駅から国際通り方面へ移動、公設市場の広さに目を見張りながら、満員の食堂で昼食を取る。ずいぶん長く待たされて、ようやくありつくことが出来た昼食はやはり私の好みには合わなかったが、合流した仲間達は結構盛り上っていた。

最初の思いでは公設市場内でゆっくり買い物を楽しむつもりだったが、昼食に時間を取られ過ぎ、他の施設を見る時間が足りず、熱気溢れる公設市場内を巡る楽しみは、お預けになってしまった。

そのような思いを残して見た、那覇市歴史博物館の「王朝文化と都市の歴史」という展示にはあまり心を動かされなかった。残念！

ずらりと並ぶ店舗を横目に見てひたすら歩く。観光客を相手の町の発展は基地の問題とは関係なく続いていくのだろうか。私なんかの窺いしることの出来ない世界だ、とばかりは言っては居られない重い問題がありそうな気がする。

今度の旅は実によく歩いた。最高齢で参加した私は、皆さんの足手まといにならないようにと一生懸命だった。幸い皆さんの労りに感謝しながら、幸せ一杯の帰国となった。

しかし、沖縄の抱える問題の大きさに、何の役にも立たないもどかしさが胸に残ってしまった。でも、帰りの飛行機内では平素あまり深く語ったこともない仲間と、人生についての語らいも出来、皆それぞれが問題意識を持つての帰国だとの意を強くすることが出来た。

帰国後、沖縄問題のニュースが流れるたびに我

が事のように感じて、一喜一憂して居る私だった。

ついに太陽をとらえた

市川紀行

ついに太陽をとらえた

何んと眩しい科学の地平だったろう

アインシュタインの美しい数式を覚えたて

呪文のように唱えていた

あの少年の日

紙面には黒々と活字が躍っていた

ついに太陽をとらえた

茨城の東海の磯辺に「太陽」の火は燃えた

ヒロシマ・ナガサキの悪魔の火ではない

それは平和の輝きだった

理解をこえた

科学への少年の希望の光であった

そしてはるかに歳月は流れ

恐るべき2011・3・11

大ナイの津波の中に希望の光は消えていった

金まみれの亡者どもがそれを地獄の火に変えた

ドナ ドナ ドオナ ドオナ

ドナ ドナ ドオナ ドナ

昼下がりの牧舎

牛たちが積まれて市場に向かう

ドナドナドオナ ドオ

繰り返される日々のくらしの風景

生きること生かされることへの感謝を

ある人は神に

ある人は自然の恵みにささげてきた
ごらん子供たち 父さんの涙を
あの牛たちがみんなを助けてくれる

だがいまは見よ

引きずられ追い込まれ

トラックにひしめく牛たちの群れを

愛惜の涙もなく

感謝の祈りもない

呆然と怒りに心をなくす

年老いた牛飼いびと

ここはどこだ これはなんだ

牛たちは何をしたというのだろう

ただいつものように藁を食べただけ

牛飼いは何をしたというのだろう

ただいつものように乾いた藁を与えただけ

つましやかに手を結び

こらえる男の白髪をみちのくの風が吹く

風よ 白髪のを吹く風よ

すべての亡者どもに嵐となれ

幾重にも幾重にも採られるべき

セーフガードの方式と方策

そこに想定外などあつてはならぬ

金を惜しみ金を溜め込み

自己保身に金をばら撒き

ついぞ人々のためには使わぬ亡者ども

ついぞ人々の命のために使わなかった亡者ども

そこで科学は死んだ その本然の使命が消えた

拝金の世に亡者どもの穢れが漂う

神話を撒き散らしすべてを隠し

すべてを津波に押し付け

咎もなき野の民に里の民に海の民に目をそむけ
なお安眠をむさぼる地獄行きの亡者ども

どこへ行ったのかいつわりの学者らよ

どこへ消えたのか追従と自己顕示の教授らよ
テレビでメディアでとうとうと説教していた

愚劣な神話 いまは邪教の経典

お前たちも金の亡者だ

亡者の顔に化粧して長らえているのか

まやかしの専門家 科学を汚す拝金の徒

おまえたちには眩しかろう

科学の良心と正義にかけて

科学者の誇りと使命にかけて

職を賭し 緘口令職を辞し

悪魔の灰中を駆け巡る科学者たちの姿は

メルトダウンを隠そうとも

スピーディを隠そうとも

勇気を与え続ける真正の科学者たちよ

あなたたちの目は見つめている

いま寒さに向かつて震える無垢の人々を

悲しみに瞳をあげるおさなごたちを

汚染の土と作物をいとおしむ農のやるせなさを

許してはならぬ

亡者ども

金に群がった政治の亡者ども

許してはならぬ

物理学の研究者たちを責め

さも正当論者ぶる俗物を

オッペンハイマーの誠実と勇気を信じよう

許してはならぬ

街中の知ったかぶりの似非インテリ

「豊かなる日本、豊かな電気エネルギーの賜物」

「はかり知れない原発の恩恵」

「放射能は健康にいい」

ガンマ線もアルファ線も区別を知らぬ

フクシマから遠い都で嘯くやから

「原発はこわくない」

ああ 人間の心にある悲しい関係よ

きみらもまた

亡者どもをたしかに免罪する

きみらはそれを言えるか

罪もなく追われた人々の前で

きみらはそれを言え

収穫の作物にカウンターを当てる農婦に

きみらは顔を赤らめることもなく

それをいえるか

「あなたたちも原発の恵みを受けてきたんだ」と

「それで食ってきた市町村」と

厚顔無恥の亡者ども

遠く離れた安全の地で

否定しえない現実をあげつらう

それがどうしたというのだ

それがなんだというのだ

値段もつかぬ「フクシマ」の地に住め

東京湾の真ん中に悪魔の巣をつくれ

恐れよう

哀れみのそぶりの陰で

大手を振り出す亡者の擁護人ども

くりかえしくりかえし

声をひそめ 恫喝し 忘却をそのかし

いつかそれらが多数をしめる日本の民主主義

デジャヴウのこの国の歴史

繰り返しくりかえす

人っ子ひとりいない

遠吠えの犬の影もない

電信柱が突っ立っている

風の音もなく鳥も鳴かない

そこにあつたのは

あの懐かしい町並みではない

死の町だ ゴーストタウンだ

ひとりの男が「死の町」といった

無能なおもねりメディアが空騒ぎを始めた

被災の人々を侮辱したと

その男は大臣を辞めた

「死の町」はいつもメタフォーなのに

いけにえに世論は沸き亡者どもは一息ついた

津波で逃げない男がいた

逃げる場所も時間もあつたのに

その男は天津波に姿を消した

一人の男が「逃げなかった馬鹿もん」といった

同級生を悼んで「馬鹿もん」といった

低級なおもねりのメディアが騒ぎ始めた

「犠牲者をバカといった」

「津波の犠牲者を大臣はばか者扱いした」

あげつらう低能記者のみにくさは

覆うべくもない言葉への無知と感性の欠如だ

自爆事故で死んだ友人にだれでも言うだろう

涙のなかに「このばかやろう」と

愛する恋人の失敗にときには言うだろう

額をつつき「このおバカさん」と

あげつらう愚かさの意図するもの

今は誰もが知っている

本当の加害者から世論の目をそらすこと

魔女狩りのいけにえのように

悪者をつくりだす

権力とメディアに結びつく亡者どもの薄笑い

言葉狩りもデジャビュウだ

金と権力とメディアの結合もデジャビュウだ

既にみたもので経験したもの

国も人々も暗黒に沈んだ日本の歴史

だが今度は落ちない

落ちてはならない

繰り返さないくりかえしてはならない

核支配の不可能も知ってはいたが

制御の理論も信じ込まされていた

あらゆる事変への対応もなされていると

信じていたあわれなわたしよ

その不実な自分も許せぬひとりだ

地殻のうねりはM2.0だろうと止められぬ

おお 友よ 永年の親しき友よ

かの東海のむら長よ

金の亡者ども

へつらいの亡者ども言葉狩りの亡者どもから

はるかに遠く

品格と存在の次元を異にして

兄の言葉は真実を語る

この東海村の原発は廃炉にすべきと

金では魂は売らないと

JOCの未曾有の臨界事故で

多くの命の危機を救った友よ

国は動かず県も動けず

一秒を争い放射能は拡散する

そのさ中第一に思う市民のいのち

洞察とイメージと全感性の命じるまま

村単独の市民非難は実現した

「責任は俺がとる どんな結果でも俺がとる」

有りえざる臨界がおきていたのだ

亡者どもよ 見よ

似非科学者よ 思え

金につるんで口ごもる言論の徒よ 思いしれ

ここに一人の冷徹な情熱の男がいる

真正な社会科学の実践者がいる

――東海の原子力の恩恵は認めよう

だがわたしは3・11を見てしまった

百万人の命のために 百万人の未来のために

金で魂を売るわけには行かぬ

友よ 兄よ 村上達也よ

きみが倒れたらひとつの直接性が倒れる

きみが倒れたら人間の直接性が倒れる

亡者どもの切っ先はきみを貫くだろう

しがみつく過去の亡者どもが足を引きずるだろう

不毛な没理論が仕返しを企むだろう

だが友よ 君は行く 子供たちの未来へ

それは日本のかけがえのない未来だ

きみが倒れたら未来の直接性が倒れるのだ

去年の春

大櫓のさみどりの葉群に春風遊び

こぞの秋

その大枝は強い野分に揺れて楽しみ

冬 千万の落ち葉を撒いた

今 晴れ渡る秋空の下

くるくると落ち葉のそよぎは変わらねど

三百年の大けやきよ

魔女の箒のすすのために

堆肥に積むもならず燃やすもならず

除染する一輪車を押す手も足も重い

落ち葉の集まりは測る線量も高いのだ

悪魔の粒子は筑波をまわり

魔女の箒は霞ヶ浦を撫でて南下した

孫娘が幼稚園から帰らぬうちに

今日の落ち葉を捨てに行く

一輪車を押しながら

世界に誇る指揮者のつぶやきを思い出す

「知らなかったということは罪なんですね」

そう 彼は原発の危うさを言っているのだ
静かに 身にしみるように

わたしには歌えない その現実を

(ああ 遠くから歌ってはならぬ)

私には見ることが出来ない その冷酷なくらしを
だからもつと伝えてほしい

津波と悪魔に追われた詩人たち 歌びとたちよ

相馬から いわきから

学窓の友のいた宮古から

賢治のイギリス海岸から

林檎と桃と牛馬の里山から

怒りを耐えて助け合うみちのくから

耳を澄ませば

友のうたう歌が聞こえる

たどり行く 幼き日々の

みどりなす ふるさと

暮れなずむ 空のあかねに

振りむけば たぎり落つ涙

たたかいに 破れしこの身

いましばし 眠らん

いつかまた この身を抱け

いのちなる ふるさと

明け染める 峠をこえて

振りあおぐ きみのまなざし

ふたたびの のぞみに満ちて

明日の日を 掴まん

「ついに太陽をとらえた」

ああ 思えば少年の日の神秘よ

真実の科学の扉は人間に翼をあたえる

真実であれ

透明に透き通っていいよ

不可能の錬金術師の手に落ちるな

そのときお前を待つのは裏切りだ

みちのくの秋は早い

あざやかな紅葉模様のはるか

峰々は白く冬のおとずれ

わが庭のけやきの葉も落ち尽くし

まもなく銀杏が黄金色に染まる

夕日をあびて「小鳥のように」舞うだろう

少女らは拾い集めて黒髪に差した

嬉しそうに はなやいで

もうそんな姿はここにはないのだ

金色の銀杏は山奥に捨てられ朽ち果てる

なにもなかったように

こんなにも遠い湖畔の村で

(二〇一一年十一月)

ヨイシ『の会の市川さんの詩を読むとランボウの
世代というのが間違いないと思えてくる。』

市川さんの「ついに太陽をとらえた」を読んでいて

ペルーの現代詩人セーサル・バジェツホの詩が思い

浮かんできた。

詩の内容はまったく違つものであるが、何故か思い
出されてきたのであった。

「黒い使者ども」という詩で、

生には打撃がある（こんなにも激しい……僕は

知らない！ 神の憎しみを下す打撃のよう

な……あたかもこの打撃をまえに ありとあら

ゆる苦しみの砕けちる波が――

と紡がれていく詩である。

現代の若者たちは詩を詠わなくなったと言われて

久しいが、言葉を単なる説明の道具にしないで心

の表現としての命を与えて貰いたいものだ、この

年老いた編者は思ったりする。

《ことば座だより》

何故ことば座なのか… 脚本・演出 白井啓治

劇団「ことば座」を設立したのは2006年10

月であった。小林幸枝と出会ったのは2005年

の4月。風の会の前身である「ふるさとルネサン

ス」の中に物語を朗読劇に表現していこうと立ち

上げた「表現舎シュワード」で手話朗読が出来る

人を募集していた時に聾者の女性がいる、と紹介

されて面接に來たのであった。

当時小生は手話での話が全くできなかったので

あったが小林の手話に動作表現の大きなスケール

感のあることを知って、早速翌日から劇団に來る

ようにと半ば強制的に俳優への道を歩かせたので

あった。

その後、ふるさとルネサンスが崩壊していく中

で、小林に出会って創出した手話を基軸とした朗

読舞を發展させていくために、市民劇団を離れも

つと本格的に表現活動を展開させていこうと現在

の「ことば座」を設立することになったのであった。

劇団の名前を決めるに当たり、色々な案が出たのであったが、結局私が脚本家という事もあって「言葉は魂の叫び。魂を言葉に紡ぎ朗々と表現しよう」という願いを込めて決定したのであった。

ことば座の案内パンフレットには『「ことば(言葉)」とは、「心を口に繁らす」ことをいいますが、心とは真実、口は表現の手段、葉は紡ぐことをいいます。」「ことば座」は、「この言葉の原義に基づいて、物語に紡がれてある真実としての未来の夢を朗読と手話による舞という二つの言語によって、自由で自在な舞台表現を創造していきます』と紹介しているが、その実際の内容とは「魂を言葉に紡ぎ朗々と表現する」である。

ことば座も、今、新しい再出発を始めようとしている。これまでことば座が行ってきた「朗読舞」とは、朗読を手話という動作言語を基軸とした舞に表現するというものであったが、昨年モダンダンスの柏木久美子さんとの共演という機会を得て、小林に出会うはるか以前に発想していた「朗読に舞う」という舞台表現へ大きく近づき始めたのである。

勿論小林の舞いは、手話を基軸としての舞表現の構築という事になるのであるが、今よりももっと手話という形にこだわらない、魂の叫びとしての舞い言語表現として構築していくことが出来るようになる。当然小林には舞の構築は今以上に難しいものとなるであろうが、舞としてのスケールは今以上に大きなものになるだろうと思っている。

今必死になって6月公演の台本を書いているの

であるが、6月公演ではホルストが伊藤道郎のために書いた(作曲した)「日本組曲」を主題とした朗読舞踏劇を考えている。今回の朗読舞踏劇は、日本組曲を全面的に取り入れたものではなく、一部挿入という形で考えている。この舞台は8月にマカオで行われる「2012年日本芸術文化の祭典 in マカオ」でもそのまま演じることとなる。6月の公演ではピアノをバックに舞いを構築していこうと思っているが、マカオでは野口喜広氏のオカリナがバックになる。

この日本組曲を主題とした「日高見国(常陸国)物語」(仮題)は、今回の台本を序章として、日本組曲を新たな編曲を与えて物語の要素所で舞を誘う曲として流れるという構成にして、大きな舞台にかけてみたいと考え企画している所である。

もの創りをする者は皆そうであるが、一つの所にとどまり安定を思考する者はいないといえる。一つのが完成されると、直ぐ次にはそれを壊し新しい可能性に挑戦する。この事はもの創りの宿命でもあり、それがないと進歩はないと言える。一つの成功に安住し、そこから利を得て安定したいと考えるのは進歩や進化をあきらめた者達の思考することである。

我欲の上昇志向は破滅を呼ぶが、我欲の存在しない上昇の志向は夢を紡ぐことになる。特に表現者は、満足と安住は創造の大敵である。破壊型の破壊衝動は考えなければならぬが、現状や既成の破壊衝動は常に持っていなければいけないだろうと思う。

文化的・芸術的に華やかな所ほど人間は豊かで幸せな表情となる。文化的・芸術的に貧しくなっ

てくるとあらゆることに我欲の不満をぶつけるようになってくる。そして思考は後ろ向きになってしまふ。

ことば座は表現集団なんだから、明日の進歩だけを見つめて活動が続けようと言ひ聞かせている。

以前に一万人朗読会なることを企画し、実現させたいと考え誰彼かまわず提唱してみたが、面白いと言ってくれたのは今回詩を投稿下さった美浦村の市川さんだけであった。

市川さんの詩を読みながら、自分たちの魂を叫ぶ朗読会を万人などと風呂敷を広げないで、始めることが大事ではないだろうかと改めて思い始めている。

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・蕎麦会席
料理のお店です(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「ふらの」ちゃん

皆さんをお迎えいたします。

TEL 02-699-476-0000

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

石岡市柴間ギター文化館発「ことば座」第23回定期公演

「常世の国の恋物語百」第30話

さくら
平将門伝説 苺萱姫物語

2012 年 6 月 15 日～17 日（14 時 30 分会場 15 時開演）

ホルストが伊藤道郎のために作曲した「日本組曲」を主題として、太古には日高見国と呼ばれていた常陸国に伝わる伝承物語を、手話舞の**小林幸枝**とモダンダンスの**柏木久美子**の共演によるコンテンポラリー舞踏劇として再発見・再創造する。

平将門の亡霊の告白にきく承平の乱の真実と苺萱姫への思い、そしてまだ見ぬわが子への願いを**小林幸枝**が手話の舞いに舞う。

苺萱姫の将門を慕い偲ぶ女の心と将門の果たし得なかった思いを子守唄の中に託して子に伝える母の心をモダンダンスの**柏木久美子**が、朧なる湖上の月に思いの映して、宵花に酔うて舞い偲ぶ。

今回**柏木久美子**は、オカリナの音に加えて、**山本光**のピアノの演奏に乗って苺萱姫の魂の声を舞います

脚本：演出 白井 啓治

舞台背景画 兼平ちえこ

舞台装美 小林 一男

（出演）

朗読：しらみひろぢ

舞技：小林 幸枝

柏木久美子

音楽：野口喜広（オカリナ）

山本 光（ピアノ）

入場料…3,000 円 （ギター文化館 0299-46-2457 で取扱っております）

ことば座

〒315-0013 茨城県石岡市府中 5-1-35 Tel0299-24-2063 fax0299-23-0150